「産後精神病と産後うつ病の本邦における実態とその影響因子の抽出」

岡　野　禎　治

【研究目的】

母子保健を取り巻く社会環境が大きく変化する中で、妊産婦のこころの健康に関するケアとサービスが重要視されている。しかしながら、わが国では、また産後精神障害の十分な実態把握すらされていない。今後、欧米並に核家族化など社会的変化が増加すると予想されるわが国の状況をふまえて、産後の精神障害の疫学的な調査を行うことは、わが国の母子保健にとっても重要な課題のひとつであると思われる。

そこで、産後精神障害の中でも、産後精神病と産後うつ病に焦点を当てて、その出現頻度と核家族化などの社会的影響因子を抽出するために、妊娠中から産後３ヶ月での期間産後うつ病の実態の予備調査を行った。また、スクリーニング・テストとしてエジンバラ産後うつ病調査票（Edingurgh Postnatal Depression Scale：EPDS, Cox, 1987）の日本版（再英訳済）を試案して、その信頼性と妥当性についても検討した。

【研究方法】

被験者は自然分娩の47名を選び、妊婦後期から産後３ヵ月まで追跡し、産後１ヵ月と産後３ヵ月後にEPDSに記入してもらった。外的基準は直接面接によるＲＤＣ（Research DiagnosticCriteria）診断基準を産後直後と産後１ヵ月時に用いて診断した。なお、非常対象群には年令をマッチさせた非妊産婦115名を用いた。

【結果】

1）産後１ヵ月時点では、産後うつ病と診断された産褥婦は４名（major depressive disorder２名、minor depressive disorder２名）で、産後うつ病の出現頻度は8.5％となった。

2）産後１ヵ月の時点では、核家族群でしかも産後実家で静養できなかった産褥婦は非核家族群と比較してEPDSの値が有意（$p<0.01$）に高いことがわかった。さらに産後３ヵ月後でも、核家族群では、非核家族群と比較して、日常生活に早期に復帰するため、心身共に負担がかかり、母体の回復がより遅いことがわかった。

3）ＥＰＤＳの信頼性に関しては、正常非妊産婦を対象として再テスト法を用いて２～３週間の間隔をおいて２回施行した。２回の得点間の相関係数は0.64で両者に高い相関があることが示唆された。妥当性については、正常産褥婦群と産後うつ病群における総得点の差、項目別得点の差、区分点をいくつかに設定し検討した。その結果、10項目の平均得点では有意差は認められなかったが、総得点平均値において、両群で有意差が認められた。表に示したように、区分点を８／９とした場合の鋭敏度は0.75、特異度は0.93と最も高くなることがわかった。

【考察】

産後うつ病の出現頻度は欧米では、10～15％といわれている。今回の産後１ヵ月後調査では、こうした数字に比べてやや低い値を示しが、産後精神病の好発時期である産後１ヵ

月以降の時点ではさらに増加するものと思われることから、産後２～４ヵ月後の時期に大規模な易学的調査を行い、産後うつ病の有病率をわが国でも明らかにする必要があると考えられた。

核家族化に伴うわが国の産褥婦はストレスフルな状況にあることが判明した。今後母子精神保健の立場から、こうした環境下にある産褥婦に対する援助体制の確立が重要であると思われた。

欧米では産後うつ病調査票が産後うつ病のスクリーニング・テストとして用いられ、その信頼性や妥当性について、一応のコンセンサスが得られている。欧米では、EPDSの区分点を12／13として、用いられているが、今回の研究では、８／９という区分点が最もEPDSの鋭敏度と特異度が高くなった。こうした結果から、EPDSを考案した Cox（1987）らが提唱した12／13の区分点を用いるよりも、わが国では区分点を８／９とする方が妥当と考えた。EPDSの有用性を疫学的調査により、さらに検討する必要があるが、EPDSはわが国でも簡単な産後うつ病のスクリーニング・テストとして有用であると思われた。

提言

以上の予備調査から、今後三重県における産後うつ病を始めとする産後精神障害の易学的本調査を通じて、以下の事項を検討する必要があると思われた。

1）産後精神障害、特に産後うつ病の発生率の推定

2）エジンバラ産後うつ病調査票の解析により、産後うつ病のスクリーニング・テストの確立

3）産褥婦の関係機関における支援体制の現状把握

4）今後の母子保健精神支援体制作りのための問題点の把握

RANGE OF EPDS THRESHOLDS AND CORRESPONDING VALUES OF SPECIFICITY, SENSITIVITY AND PREDICTIVE VALUE

Threshold	Sensitivity(%)	Specificity(%)	Positive Predictive value
5.5	100	74.4	25.0
6.5	75	86.1	33.3
7.5	75	90.7	42.9
8.5	75	93.0	50.0
9.5	50	100.0	100.0
10.5	50	100.0	100.0
11.5	25	100.0	100.0
12.5	0	100.0	100.0

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

【研究目的】

母子保健を取り巻く社会環境が大きく変化する中で、妊産婦のこころの健康に関するケアとサービスが重要視されている。しかしながら、わが国では、また産後精神障害の十分な実態把握すらされていない。今後、欧米並に核家族化など社会的変化が増加すると予想されるわが国の状況をふまえて、産後の精神障害の疫学的な調査を行うことは、わが国の母子保健にとっても重要な課題のひとつであると思われる。

そこで、産後精神障害の中でも、産後精神病と産後うつ病に焦点を当てて、その出現頻度と核家族化などの社会的影響因子を抽出するために、妊娠中から産後3ヶ月での期間産後うつ病の実態の予備調査を行った。また、スクリーニング・テストとしてエジンバラ産後うつ病調査票(Edingurgh Postnatal Depression Scale:EPDS,Cox,1987)の日本版(再英訳済)を試案して、その信頼性と妥当性についても検討した。